

2012年6月28日

大学教育学会第34回に参加して

教育開発支援機構

FD推進センター長 川上 忠重

2012年5月26日(土)～27日(日)に北海道大学において、大学教育学会第34回大会が開催された。本大会では統一テーマとして「転換期の大学教育」と題して、社会の求めに応える大学教育、科学教育のあり方について議論を行った。初日は午前中16のラウンドテーブルが用意され、各テーブルに分かれて個別のテーマについて報告とディスカッションが行われた。ここ数年、ラウンドテーブルのテーマも多岐にわたり、あらためて高等教育機関の現在抱えている共通問題の多さを実感したが、今回はテーブル12「大学IRコンソーシアムの可能性—取組の事例報告と今後の期待」に参加した。IR (Institutional Research) とは、現在、解釈もいろいろされているが、教育、経営、財務情報を含む大学内部の様々なデータの入手、分析や管理、戦略計画の策定、大学の教育プログラムのレビューと点検等、様々な角度から包括的な内容を含むものである。今回は主に教学に特化したものであった。報告は4つあり、「英語のベンチマーキング」甲南大学伊庭緑氏、「学生調査を通じた大学間比較について」北海道大学山田邦雅氏、「IRiS と IR ツールの開発について」大阪府立大学大坪伸行氏及び「大学IRコンソーシアムの設立と運営について」同志社大学江原昭博氏であった。今後、各高等教育機関における学生の教育効果の測定及び大学間連携による相互検討が重要であることが指摘された。

午後は北海道大学名誉教授、ノーベル化学賞受賞である鈴木章氏より「ノーベル化学賞への道」の基調講演の後、自由研究発表Iに参加した。自由研究発表Iは7部会から構成され、教育方法・授業改善(3部会)IRの活用、教職協働・教職員

能力開発及び高大連携・キャリア教育等についての事例報告が行われた。

2日目は、自由研究発表IIの部会9「教育方法・授業改善(5)」に参加した。私立大学における「正課外教育プログラム」の現状と可能性—日本私立大学連盟加盟校へのアンケート調査からの考察—大竹秀和氏ら(立教大学他)、組織的な教学改善のために—知の共創サイクル構築への取組—井上史子氏、土持ゲーリー法一氏(帝京大学)、立命館大学における学部・研究科へのPDCAサイクル浸透支援について安岡高志氏、沖裕貴氏ら(立命館大学)等の独自の私立大学におけるFDへの取組は、今後のFDに関する方向性や施策を検討するうえで、多くの示唆をいただいた。

午後は、シンポジウムI「学士課程教育の質の改善と教育情報」と題して、学士課程教育のアウトカム(学習成果)、GPA、数学力育成及び実質化(認証評価から見た現状と課題)に関する取組事例が紹介された。シンポジウムIのまとめとして、佐藤浩章氏(愛媛大学教育・学生支援機構)、安藤厚氏(北海道大学名誉教授)より、学士課程教育の質の改善に向けて、教育情報を、①学内でどのように収集し、どのように活用すればよいのか、②学外にどのように、どの程度まで発信すべきなのか、教育情報の収集・活用・発信が円滑に進むためにはどのような文化・仕組み・制度が必要か等の問題提起から、意見交換が活発に行われた。

本学における教育情報の活用はFDの実効化の観点から極めて重要である。今回の参加を関連教学単位とともにその一助としたいと思う。

以上